群書類從

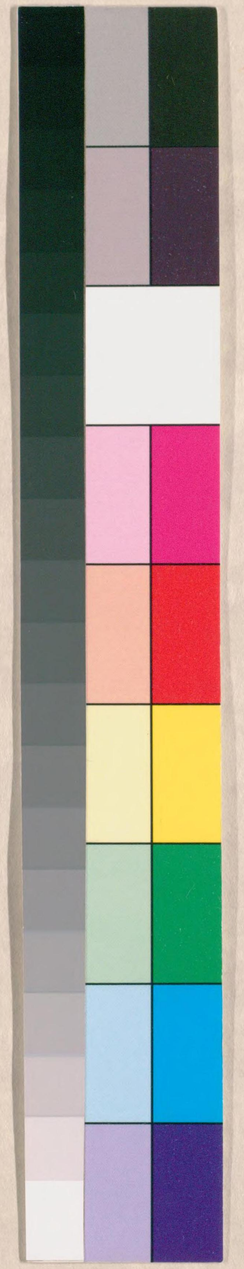
二百九十八

127
666
1

127
666
1

289

東京圖書館
和書門
叢書類
二四
五
七
六六六
架
號
冊



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

蔵書印

群書類従 巻第二百二十八

和歌部八十三 家集一

明治八年文部省交付

TOKIO LIBRARY
東京書籍館蔵書印

太政門院御集 合點 家隆卿

詠述懐十首和歌

寄風述懐

風のおとをみぬうら紙都とて
[illegible]

寄月述懐

日
[illegible]

検校 保己一 集

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

元又元年漢公郎及び

雪速懐

ゆき又沾る兒姫となりぬらん
めくゆいて雪と書よめる

曉速懐

清濁
曉乃ふさぬを称る兒ごさもあめ
又ものくすぐる雲もめる

寄夕速懐

清名
夕雲乃かうら海かて白雲ゆう
初め字ようんをめつ

海速懐

あまを舟うふ人ひとりふたりあま
家ようりめて安相なる三ほうくめてそうくい

寄山速懐

いその称乃松浪もあまめ
うるりくかき数不ちくよろくい

寄河速懐

行水乃流れ絶てさうこ
いにの細ぎ乃又後ぎ乃流をうくを汲ると

野速懐

この野

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

かくこそやあまつそらなるむろの木
　同前

寄風述懐

すまの浦やそらゆく風のかよひ路は
　十首すべて人を通ふ事沙汰を経事深い

詠百首和哥　兼久二年

春

立春

氷とく志賀の山風吹まくに波もやあらん
　始うらをえてく之海をあらひ

子日

春の野にくさつむ子らが白たへの
　子日のうたは八一句一字をも
　て句法とせん

霞

いそ辺漕あまの釣舟とをなる物
　能登海人多くこゝに年沙汰

鶯

春かすみたつ山の端出初て
　山のうぐひすなくなるらん

若菜

紀貫之

白雪の神よはひをくまなくに雪ぞさらにも積

うるしくいふ也雪は優美いふ

殘雪

霜枯のくさ〳〵今やかくるらん小松のつゝ雪ぞ消

梅

梅を見し梅のそがふやなぎぬらん

うぐひす又はさまざまのひるねを優美いふ也

柳

はるかぜのふくにまかせてあるしなき物ゆへ柳

一句を相違なるべし

早蕨

さわらびのもえ出る春日と成しよりうゑてそたくも

同前但歌の心は皇の位時百官うやまふべきことの永くそたくもうめ出るを

櫻

いつるまぬ花のはてまであかしなを見んのみ

うらさくなるよう又風よふきて物ゆへ

春雨

降みよりぬきもる雨にのみ

紀貫之

素謳

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おもひ知るかなくの山吹盛すも散るも物を
吐出すいろいろもあるべきものにはあらんなど
と感じいしおもひ出でたる

三月晦

春とゝもにゆきかふ人の雲もとまらぬ
是又人の身をとゝめぬるもとゞまらぬ
ゆく春

夏

更衣

時ならでなくうき身のうのはなの
又何をうつゝの夏衣
卯花

ものうきをなくやほとゝぎすの初音
是郭公のうたゝねよりいしの
夢

菖蒲

沼地山ぎはなどのあやめふく日
是又昔の人に此菖蒲ふかんようみくるしきあり
とかいしき水辺をえらびてふかぬ
事ありき

蚊

何事のおはしますかは知ねども
蕾

人寝ぬ秋の夜をいかにとてかとぶ

早苗

みかつきのかけさやかなるこよひかなあすしもかくやうつすへき

照射

まとふなるうつ田のやまのよるのしもしるくもおけるかりのこゑかな

五月雨

はるさめのふりしのそらはれやらぬこよひのつきをなにまつらむ

盧橘

昔植けむ宿のたちはなかをかけはいとのひてんかりのこゑする

二首なからへて今はたえすなりぬる頃

蛍

かつはゆく夏のしるへやうつるらん秋をまたぬ蛍なれとも

牧童吏人

かやりひの煙いとうすしひつしかふ牧のこゆるめのよもすから

蓮

はちすゑのつゆをたまとやみるれてかつはうつろふ蓮葉のうへ

二首北宇治にてかくらむ

氷室

ふしもせぬ山せなれとも氷室とてかきもらすなき秋のくれかな

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

泉

秋

六月祓

秋

立秋

七夕

我いろ染ひの糸ならしとつくるたなばたつめ

萩

女郎花

落

菊萱

きく旅のつれ花とちるめるかとも

葉

ぬらす雨さへくまれもるひかのすそみそそる姿

萩

萩の葉よ雨もこぼひのむすめらが
こゝ百合ねるくまさ百合

草原

くさむらやまことひとかるさよ夜うかりかのひさもり註の雪うを
くさむらまるみ

鹿

みかさやまをしかの村萩ちるひさ鹿の
ねのなかるらんこゑ

露

白露よそらのくものかよ夜ふるくさむらを

霧

物さびしかりけれふかきよふる夜や
二首又春霞春霧秋夜

猿聲

久かたの竹のうき節の檜をうきて

旅のいとなみすることなど

羽逸

雲月のあとは我をやどすひさ
なようにも

月

久方の月のみやこはうらやまじ
ながめ馴れたる
ながめ馴れたる

擣衣

あさぢふのをのの古里よなれ
ゆく
二首又宗尊親王家百首歌に

出

雨ふりあがるあさぢうのをのの
ふる里
菊

結後

ふる野の野の日数いろいろへとちる
二首又宗尊親王家百首歌に

紅葉

ふるさとのみちのの森や浅ぢう
又詞おりふくは勝ふ

九月尽

大空の雲のはたてもあきはてぬ
我身ひとつのゆくへなれども
又宗尊親王家百首歌に

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

冬

初冬

雪降ふるあしたのさまよみ侍ける

又有友ともとめてこゝろをよめる

時雨

朩おつるみやまのふもとうき事を

毛詩こゝろをよめる

霜

いかまてうあさちふ末よりふへきさま

すゝ句ろいく復ふれ

霰

笠句ねの松との秋之夜

常風情ふかゝるも

句白ゝ

雪

百とよの雪をおもひやりて風情をよめる

程ふるまゝにうれしさをよめる

寒蘆

見渡のをはいまはのあしをよめる

ふる

陳拾

まくさもしをるゝつゆのそこへのちよまを

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

二首をけいあり白ひくものしそうよんとをえ歌うれ

氷

谷川のやもりもりうすくはるこのせ
常人極風情よ」てもはてきそうろくすこもれ

水雪

冬ふ泥のうちふ氷のをしろうそうろ
未白ねしこさ氷雪よりけをそくよりそうろくすこもれ

細代

はし姫のねやのつまよ出ぬうんとあるふ本
そし姫ふとハうふ氷をあるふ泥の書小
くのうろうろよ

神樂

その名ぢうの神代のあさの歌をうるやはし氏の名をバイかたうす
神あそびうろくおようろくふ

雪物

焼古
そし花のふ共雪のつもりうれて八日のをふ氷次ぐ地
高氣をそくふ白あくれそうろくしくくるを雪泥は事白ねを
もうくれ

炭竈

すみ屋やおくふ共雪と歌とを焼そうろ氏ふ
焼のふ夜よその里ふをそうろくふ事あうろくふ歌をあり
うろくそうろ焼ふそうろくとも

燈火

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

歳暮

窓

初窓

恋

不遇恋

初遇恋

後朝恋

逢不遇恋

袁さてみやうよりん白袁のかさ
ちまいハすそ〳〵芳いうや

旅恋

可てこいくろ句をものふらん松
そそ〳〵ゆそうくみや

恩

見むろよう称ひひりくえう
あそ浅々そて門前そ

行旦

波の我四へとそふ小志そをのまる
須ま

暁

ふかみ〳〵神そうあるめ坊まものひ
みそうそ二そ旦々そうそ

雞

暁

窓をうしとそあ〳〵日礼志そそも
そうハすくよ芳と当うあま
そ時おくいはそくみそうそ

松

そそ須そやあまのそはそうまる
そのねを

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

竹

岩

鶴

山

河

野

関

二そくの舟あみ釜さゝやかなる雑具

橋

くみ違ひ板をおうて其そこ柱をたてゝおりくに至りて

海路

あらかぜなどにあふと云ふ事なし

うくるねをおいてのぞくうきあがりてくらげのごとくなる

旅

おもてをつゝむ物とりひろげ小さきみやこおりうる

其価ねぎりてかふ

別

おもひあまる程いかばかりまさりてまさるらん

人目をもつゝまぬ程にてまさるらん

山家

世のうさにたえこもる時も山里のかりのあるじすることゝはゞ

くれ竹のよゝをかさねて

田家

苗をみんとてうへつぎの面積をはかりて

きりの角よこたてくぎをうちてめてくい

懐旧

雑

あつ松さねをのうそふやそめつらん人目しろのをちのみやま

冬

姉をうめの茶よはらくひの孫すこはるふるそ松ちく

日重の月

春

八ひらの城よ独八ねをのまてくうもひをちらし法よの月

夏

あつてつる月うくみかをく物いふ声ちかをくろくろと指と宮人

秋

新後

おもふ事ありてすめる月をなにおほろくらくらん

冬

立田山ふもとや茶まて小鹿めとしおりうきなのよの月

日重の月

春

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

なようてくな

夏

あやめ葺ふる沼のいてそかきつ
なくれくはをとはうふ
ともこのをそよいふと宿とな

雑

夕雲はまちをもめるさうれ
なようてくな

冬

雪雨をふ面いふはくふ次うよ
もそうふあらいの水

四季雲

春

霞ふうぬ杉葉乃松よ当うけ
みん相ふくふとな

夏

河雲雷や雲ねのそれすの
又うふくな

雑

村雲のあえふくてそみて

まてそよふくくさのいろ

冬

あの日の雲のみおすてそやら

又同題 類句入

雪夜風

墨

吹ふく風の夜とうや雪もよふ

片乃やとうふくくん同よふくそん

夏

さとうなとうもれこをそ風色て

秋

人となあるそ秋の寂風よふ

二首ふくくよ百人

冬

ものくやあまれ夜のうく風

心句ふくくあまの夜の簡うを

諒闇十首和哥

春

墨風まふ一時来

時うの風を活をうまふ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

あくれけさうめてうくひすのこゑ

春入枝條柳腰低

梅始乍開匂ふうつろふ花の雪

雁過猶留頂の霞

岸もうえうく梅のかんばしきあたりかな

ちるはさくらをうつすやうらめ

白川落梅浮澗水

きえもこほらぬ神さびに我にそ梅ちるこの谷川そ

ちるくらく

樹根雪埋餘花發

春のあけぼの

曙雨晴風一経花

雪のやうに梅の花ふる庭をはきよせてもとの木もとにつもる

鶯去庭引落花

鶯のさそふとはなくに梅の花ちるをうらみて鳴(なく)にやあるらん

柏緣繚乱鶯啼

うぐひすのなくこゑもうつろふ梅の花ちるをおしみてやなく

緑苔花落門空閉

緑こけ花ちる門空閉

風ふけはやうやく梅の花ちりもやしぬらんあるしなき宿

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

暮春花下漸薫風
夜雨共花の夕べへありるなり
　もいつるうくる
夏
初着單衣
久々のあけぬる夜ちくさ移
一村の山雪曙雲の
橋のこれそちくさのはる
夏橋
恵橋
夏祓の波ちくさのつくる
秋

緑樹深蝉遠晩涼
まくまさけくそれ社の夕べ
萱火初花秋已近
をくく京ちのよみそれてちく
　ちくくれん初百人勝芳
冬

宮中海月初知秋
住吉のちくれてくる月の
歌ち星河欲曙天
七夕
七夕
七夕

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

二首秀逸歌合中　秋

寒露

已催荷上玉
初雁欲過江南月

遠寺暗蒼苔

初雁暗過寒露月
遠寺聞擣衣声

暗聞擣衣声
初雁暗過寒露月

二首歌合　秋

擣衣

月宮嫦娥応有恨
長夜孤閨誰与同

擣衣砧上風
月宮嫦娥応有恨

月宮嫦娥応有恨
擣衣砧上風

擣衣

月前擣衣夜
風送擣衣声
月宮嫦娥応有恨
長夜孤閨誰与同

和漢連句

なりたりし初事よそふいふうちを
咲るはいふ程もなく春さめて

雪の薄羅花嶺雪天

雲なゆくてさしはさむ月

書そよりろくろ

空清月浅如鏡

いや重のもみぢうつす川風

ふうてさしぬる

梅花風起暮湖香

みし面はやあのそちらくうの塩のそふみを

暁を雨山雪氣を

夕雲乃山のうす雪ぬしもなくろ

二そ又詩作ろ

恋

名残後会知何日

夢をくらふもうつゝ哉

雪月花時最憶君

情をもつゝみ詞をいつもうらみ

友情難忘

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ほとゝぎすしのびしのびにきゝそめて
　孤宿宿時鳥
呵ゝあるじうとくそうれ申ぞ宿
　世間猶泊海亦遠
かりそめの海のそこふかき恋
　三そこりくよよそこりくよ
　雲愛山雪暮夜
わすれやすくまた思ひそめ
　莫對月明思往事
神の月よるれ松かげひそそまし
　往事眇茫如夢
むかしてみそらに見ゆるおいの浦を今ぞ
　日暮碧山空憶君
うらやみしのうれ雲のうへ
　多夜座禅観明月
しるの月かのそらにかくれ
　多夜は鶴人叫月上中宵
　但有衆智浣我心
新すめるいそ風のまつかぜ
　吟罷よるちそ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

題しらず　権僧正公朝

雲つく空ふきもとどめてゐる嵐
　　松も双松の面影の下

我をおもふ袖をもうすく年ふれど
　二つある名はよそながらぞ

源三位頼政　兼久四年六月午会

月前松風

いつまでか日ぐらし茂る庭の木の
　月ぞ夏の旅宿

月ぬしと如何の日までかもちひらむ
　月前久恋

変らでもなほ月のみぞ恨めしき
　三首みな題あり

源二十首後会　貞応元年三月二日

花三首

山ぢかくひとりあるをぞ思ひしる
　ゆきをわするる春はなくとも

あらざらむのちもいかにか桜花
　幸西成仏房

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

郭公二首

さくら人乃神しめゆふの郭公
　　なきわたるこゑおもふかたより

時鳥なくやあやめのねもあらん
　　社頭郭公

月前郭公

あかつきの梢ふかみよ月のうへのほとゝぎす
　　さくらかりその月をうくしてふ人そなき
大井川ふるき月をよみてそ
　　ありをよみこゝろをよめる

ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草
　　郭公をよめる

雪の遠ハみを作ろうれのふ
七夕ハ文をれ詰つをてうつ
二首 詩歌よりうくゝをゆ

寄衣

つゝにちひろ共浦松帰てもつ
袖(換古)巻をのこちつゝまり紀りやゆ
元文元年正月

ゆ〳〵ふうかひやうやうのえ
らうよろう初る時をさかう

老ハ労地ゝ元

ちおうちうゆき毎の山代ほうめ
そよう〳〵

ゆをまつとふうふ立あまてそ
うとうう程〳〵

詠五十首和哥 貞享二年二月十日

春

林雪窓雁雪窓紅

和のすゝふもやゝのんうも
うん降雪元

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

露曉庵枝花始開
春の日ものうらかなるに梅花みるに
　　　

雲情雁塞之功名
久行日霞乃ちくまかあかさて人おろのうまの
二そいよまちうてさうて
夏
竹亭法会倫宣文
ゐ花のうちあ行のうま人の神をすゝ
言なようくい
花葉雲霧龍風祝
たゝ神の句ひを風のたうひさて
谷静修園山言語

ゐ月の山をくきゐ
ゐてようくい
杉る風有つゐ秋
雲のきや月ゐ心頼ゐ言
不見蝉聲客意出
夜蛍火りれ句ゐ
二首ゐい
秋
風波明東ゐ海惣
きたうらくれ杉をきうそ夜

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

黄昏剰殘夜雨重
惜乃久時之日数多
暁之寒風身尓染
我宿の庭の秋萩咲ぬらん
竹風の葉月の
をとなふ夜半の雨や更ぬらん
由来感恩互秋
多乃め始のみ
あそん伯
源朝臣於今慶康薨

源まや始のころふを感
文屋康秀
初乃秋風ふく夜半雨乃
藤原清人宴
きりく鳴つゆのまに
萩乃花
墨河月色照清池
三条右大臣
蘭蕙芳猶擢芳
むつまじきたち浅茅を
宮内卿
宮人一なつ乃等ふる

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

冬

無期待のお淑梅風

初雪もうら悩乃時雨もうるおりて

心もそらにおりふしも

雪踏梅咲見る花

おもふまゝくにほふをみしうめの

雪よりといみじきかをりかな

霜妨露侯宝暦露

とく露もしへいもうさ裏のうら

群源當叩答心

三首ともにうら初すくうをとゝ歌ゝ

悲

楊墨妃陶唐帝恩

幻をうく汁をうくさめくゆる

年くに別思ふ秋の

姪もうとよこゆるうれをさけて

幸園独外妻夏

稲のこ秋やうさもしらつゆひあて俺ぬろみそれようかく
身化早百朋杉骨
ねこちつ教と志つる泪こそつあ
洞当西寒白神郷滅
爰にてみちこみまにの華のこ
おそくみてくるれくそつ
雑
殊霜成庭見まそこ
まこそれやの松まのあまつ
蕭索村風吟笛雪

萬のなりけすこ雨村色よこ
ちえるというろ
故山安全吟雲孤
人志あみちのおくな行里て
晴後青山添牖迎
ふちこ死むひのみよ方時くあ
三王世勢眼前
月満を夫雪こそ
源洞安風老梅遊
昔添泪乃旅を吟すこて

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

人如馬路穿雲出
[illegible]
暮色梅標寒靄離
[illegible]
鶴石春雲生杭上
[illegible]
曉龍乾元時在原
[illegible]
東通玄苑雲東客

[illegible]
[illegible]
[illegible]

詠二首和歌　貞応二年九月十三夜

関中紅葉

秋を今はのきはの色ぞとも

をしからぬ

みちすがら袖をのみ染むる

暁月関路

露のみとあえなくもろき

二首ともにすてがたく候

詠百首和歌　貞応二年

紅葉

秋の色の野もせのおのおのうつろふ

寄雨述懐　貞応三年四月廿日

詠百首和歌　貞応三年四月廿二日

雨

雲よりうへに

詠百首和歌　貞応三年四月廿二日

野雨

雲はさらなり

この風情いづくのことぞ

山間雨

みよしのの山のまろきをてらすとて

元八御芳之
橘為兼
花みよと春こわくらん日ころの
雪打ふる
ふけ行ままつとはいくそ夜あらし
雪の朝花
ふすま川あさあけのみちをたつねつゝ
誹諧
誹諧の百韻歌 自慈元年七月廿日
如意丸

小倉山ふもとつとをく霧ふかみ
雪出
雪つゝ松をもるく時雨つゝ
羽近
出ぬ人をまつらむ犬も吠ぬるに
孔雀
今とてやつゝむ袖のうへならん
初恋
旅風のそらひく雲のとまりつゝ
誹諧
誹諧の百韻歌 自慈元年七月廿日
源氏

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

萩苑

うへあるじ
小男鹿

泊まりけるつとめて
雲

をの山
無極水

ふかきみどり
庚申

年来隔心ありてうとくなりにけるを思ひ
徳川家思郷　貞享三年八月十六夜

ふるさとの
新嘗会　元年十二月廿五

御会の
三首同じ心を

惣社中
うたの

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

上作地所穀一切免之百中之夜々ゝ
唯同し中還亦念作致候今迄之右躰之上言
上斟酌長雅秀之ゝ毎年書加之
共同年之ゝ之百姓等申上候旨ニ而上候ゝ

春立之旨　此下仮使年書加之

ゝ之ゝ之ゝ之

雑十首

月前会佛

西へゆく月の行方をしたひてや
　月前述懐
おもひとて神の教と祈るらん
月前の世を
生ながらうき世の外をよそに見て
　うた
　第二名十首
野も山も不出ながら世の事わりを
極楽の内海のさとりといふらん
文字の名ばかりを浪風にたとへて

八重葎さしもさびしき宿ならでしげき
年つもるふみさく花の雪
別路をみやこの雁を友にして
降ぬ前にと急ぐ旅人
非代ともあだ名をまだきたてそめて
何をまことの恋ぞともなく
いく志ぐれ我袂をぬらすらん
来ぬ夕をのまつらむ
来名十首
世にあふもうきも梅花香に
咲ぬるも散るも春のこころ

雑三百三十八

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

歌合十首

山ふかみ谷の川風ふきすさみ
岩間をもるる秋の夜の月

露ふかき袖のみならず秋の夜の
月にぞ物は思ひしられし

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

人心てらひのそらふかあらねとも
　　屋ごとを
等こせて秋ともひとつ
雨後の初もみち
雨後の初もみち
　　名所月
うすはまてらすかたのうらかせに
はまちとりなくひんかしの
雨後
雨小袖の初をまつひろ

かくいうちに、ともだちの人々もうちつれて、
ゐまちにさそひ、離の座敷にて、
茶杯よりはじめ、ふるまひ、
見わたせば、うら一面に、
高低のやうすに、枝ぶりあざやかに、
みどりもこまやかに、
生垣のつくりやう、
みるにつけ、
金とりてうゑ、
同窓

名所の川うち石かぬ、
あれ共、
市人のもの、
そよろに、
いくよとの神のもりにまつりて、
我ゐなかに、
あひ坂の石のうへに、
形あらば、
うらやましき、

花光契多年

梅花匂ひそへたる袖の香に百代の春を契りてしと

長秋月並事百二首

百とせをつもりつもりて久しき秋を

澄みの池の底入ぬるゆふべの月

寒二十首

寄風

なかめやれあしひの笠面影にたつるひとへの

月

いざ言問はまし梅を秋の月契りおきけん

雲

面影にひとへの笠を忘れやる山のあなたの

嵐

そことのみ出てうたがふ松の雪

雪

年ぬしと仰ぐおふくの袖の白き

山

あふぐかひありとや教へん

川

明日香川あとをたづねや教へん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

野

もゝそよる
ゆふ風ふけば
をのゝうへの
萩のうは露
ほろ〳〵と
こぼれてもとの
野べにこそ
なれ

浦

花ぞうつる
神しの濱の
汐さゐに
あくるあけぼの
のよにこそ
あれ

霞

あくるかと
まがふやうにも
あるものを
いつまでかとも
春の夜の月

松

年へても
なほ
ときはなる
ものゝ
ふかくも
ちぎる
ことの葉

桜

いくめぐり
さくらの花を
ながめきて
ちとせの春に
あふぞうれしき

竹

題名
異竹のうれ
ごとにぞ
ちとせふる
ためしを
ねがふ
ことの葉

萩

さをしかの
ねぐらの
もとの
萩の露
玉ぬく
ばかり
ぬるゝ
袖かな

まちこえて
きてもとふべき
ものなれや
あきの
ゆふぐれ
ひぐらしの
こゑ

紅葉

ちりぬとも
あやなうき名
をたてゝ
やまの
もみぢの
ふかき
ちぎりを

雪

ふるとしの
よのまの
ことを
おもふにも
あはれ
つもれる
雪のうへかな

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

扇

初うちわとあふぎあはせてもとめけるに

蓋

雲とのみ花とそるやそうくしき

警

我恋はそらふみすてゝ神まつり

夜

さらくし恨あらてやすからん

枕

なれぬ夜の枕のうへうとき

鏡

海女のくしけつるかゝみ

燈

宮ゐ見し灯のそらや大淀

席

ゆふうらふかく寄けむ

韻字六首

軒

世ふねもいかやう彩えの月をこの

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

寒夜の私の夜の杉あんをそのうちまで

猿

山深くすごろく月のうそぶきぬ

魂

あくうて面あてしるの杉やおくん

川

あくうて面あてしるの杉やおくん

痕

かうよ面見抜あうふ三百を吉よろうもそ

朔日　こそ

當社の名をとゞめたるそ猿雲拾遺大そうら

夕霞

拾遺集春上

春霞

拾遺集春上

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

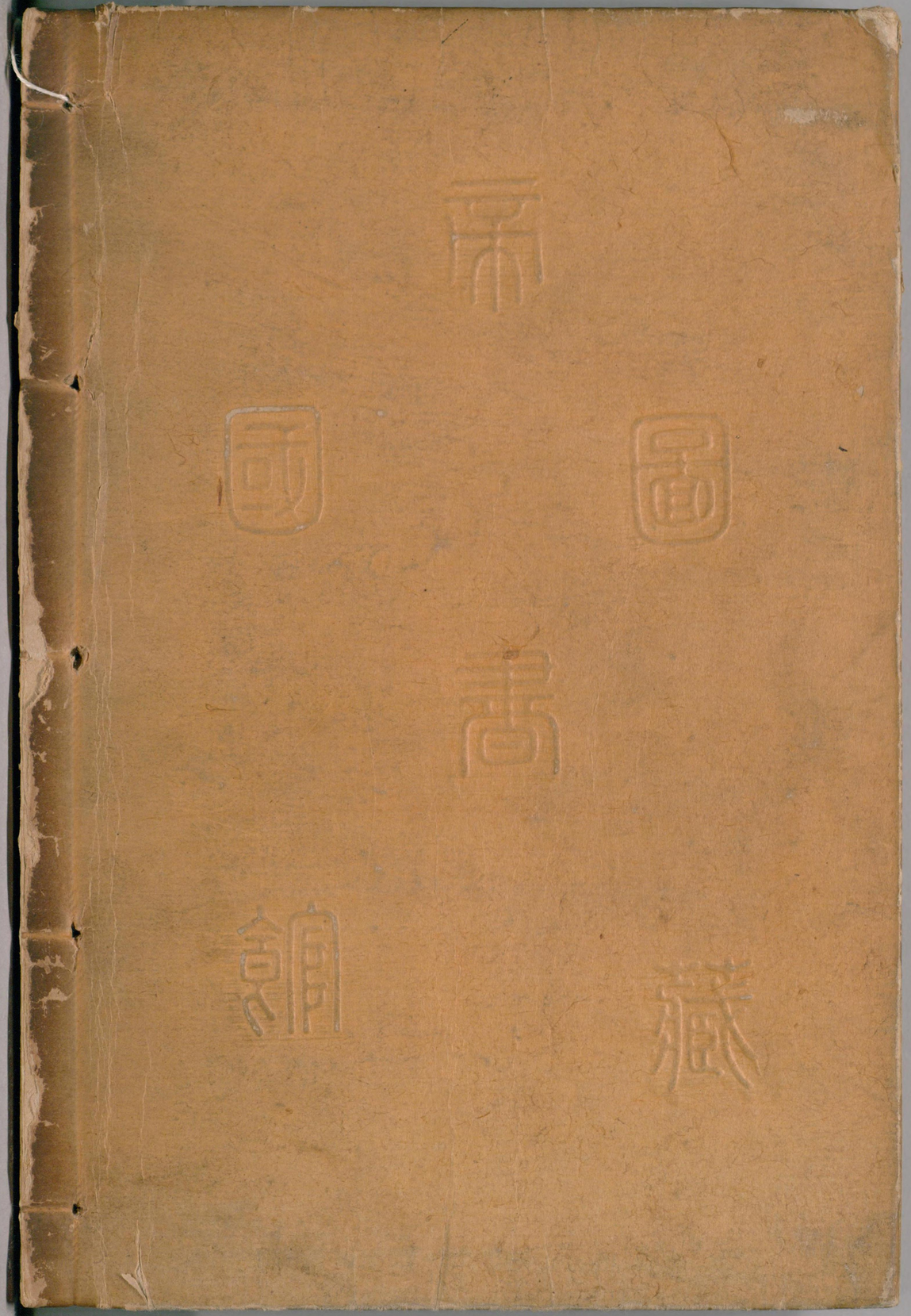
勅諚集以新本令校授早可奉
西寺者也
永祿八年乙丑仲秋念二
正二位藤原爲康判

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用